

『 世界に打って出たパラグアイ 』 ～山椒は小粒でぴりりと辛い～

<はじめに>

カルテス政権の外交政策を理解するには、次のポイントを押さえておくとうわかりやすいと思います。一つは、パラグアイが小国であるということ。二つ目は、それと関係するのですが、パラグアイが貧しい国であるということ。そして、三つ目は、国際場裡では、目立つ存在ではないということ。四つ目は、パラグアイが南米の中心に位置するという地政学的な側面です。

<国際場裡への挿入>

カルテス大統領がよく言うことの一つに、パラグアイを国際場裡に挿入するということがあります。これにはいろいろな目的があるのですが、まずはパラグアイがこれまで世界であまり顧みられていなかったという反省があるのでしょうか。それがパラグアイの実力であると言ってしまうえば身もふたもないのですが、カルテス大統領としては、これからはパラグアイもどんどん外へ出て行って、政治的にも経済的にも、山椒は小粒でぴりりと辛いという国にしたいのだろうと思います。これは、単なる国家としてのプライドの問題だけではなく、それがひいてはパラグアイの国家としての発展につながると考えているからなのです。国際場裡で目立つ存在であれば、外国からの評価も上がり、外国からの企業進出や経済協力にもポジティブな影響があるとの読みがあるものと思われます。この観点から、昨年外交の中で大きな出来事は、メルコスールへの復帰と第44回OAS総会のアスンシオンでの開催でしょう。



パラグアイの位置

<経済開発への貢献>

次に、外交を国の経済開発の一手段と考えていることも、いかにも実業家であるカルテス大統領らしい発想です。もっとも、外交に対するこのような考え方は、今日ではどの国の政府にも共通してみられる考え方であり、早い話が、我が国も同様な考え方に基づいて、民間企業の対外進出の支援を我が国外交の主要な使命の一つとしています。しかし、一人当たりの国民所得が4000ドル台の貧しいパラグアイにとって、自国の経済発展は喫緊の課題であり、外交によって国の経済発展を後押しさせることは、一層大きな意味を持つのです。



第46回メルコスール首脳会合

◎その1:メルコスール(外交通商の柱)

パラグアイ外交の柱の一つはメルコスールなのですが、これは、メルコスール抜きではパラグアイ経済の発展はあり得ないという事実から来ています。なにせ、パラグアイの貿易に占めるメルコスールの割合は4割にも達するのですから。ところが、パラグアイは2012年6月以来、メルコスール

への参加権を停止されていました。憲法に基づいて当時のルゴ大統領を弾劾したにもかかわらず、メルコスール諸国から、「国会によるクーデター」という摩訶不思議な汚名を着せられて、民主主義が回復されるまでメルコスールの活動への参加を停止するとされたのです。しかもその間に、パラグアイが難色を示していたベネズエラのメルコスール加盟を、パラグアイ抜きで承認してしまったのですから、パラグアイは国としてのプライドを大いに傷つけられました。しかし、カルテス大統領は、このような過去のいきさつも水に流して、就任早々メルコスールとの早期関係正常化に向けて動きました。その結果、ベネズエラのメルコスール加盟議定書の議会承認を実現し、昨年7月の第46回メルコスール首脳会合に出席して、名実共にメルコスール復帰を果たしました。この経緯からもわかるように、パラグアイにとってメルコスールは死活的な重要性を有するのです。

◎その2:太平洋同盟(新たなパートナー)

パラグアイの国内市場は小さいので、その経済発展には外に打って出るしかありません。このため、パラグアイは自由貿易の推進を支持しており、中南米の貿易自由化、一層の統合を支持しています。近年ではメルコスールの他にも太平洋同盟との関係緊密化も探っています。実は太平洋同盟4カ国のうち、チリ、コロンビア及びペルーとはFTAを結んでいます。メキシコとは現時点では経済補完協定が締結されていますが、FTA締結に向けて鋭意交渉しています。まさかメルコスールから太平洋同盟に乗り換えることはないと思いますが、少なくとも太平洋同盟との関係緊密化を積極的に進めています。

◎その3:二国間関係の活用

少し視点は変わりますが、二国間関係においても、パラグアイは自国への投資誘致や経済協力の獲得に積極的に取り組み、大統領が陣頭指揮を執って自国の売り込みに奔走しています。たとえば、大統領の外国訪問の機会にはこれらの項目が非常に重要なものとなり、具体的な成果が見込めない場合は、訪問直前でも訪問がキャ

ンセルされることもあります。そのほかにも、大統領自らが年に3-4回外交団と意見交換の機会を設けていることも特筆すべき事だと思います。当地の外交団の代表全員が一堂に会し、大統領自らが政治経済の現状を説明した後、約1時間の質疑応答と、それに引き続く会食があるのです。このようなことは、世界的にもあまり例を見ないことでしょう。

<人権外交>

外交が内政の延長線上にあると言うことは洋の東西を問いませんが、カルテス政権の主要政策の一つが社会包摂の実現であり、これがそのまま、外交の上でも主要政策の一つとなっています。上記の第44回OAS総会のテーマを「社会包摂を伴う発展」としたのもこのためです。実は、昨年外交上の一番大きな勝利は、おそらく国連の人権理事会理事国への当選でしょう。パラグアイが人権理事会に何故立候補するか

というと、ストロエスネル独裁時代に人権蹂躪の苦い経験があることから、人権の尊重は憲法で規定されているということがありますが、このほかにもインディオの保護や貧困撲滅、貧富の格差の是正、社会的弱者の支援などはすべて人権問題であり、パラグアイが人権理事会の



第44回OAS総会

理事国として国際場裡で人権擁護政策を推進することは、そのまま内政での大統領の公約の実現につながるのです。今回の当選は、パラグアイを国際場裡に挿入するという目的とも相まって、非常に大きな外交上の勝利でした。昨年3月の人権理事会におけるスピーチにおいて、ロイサガ外相は、人権の保護はパラグアイ外交政策の礎石であると述べています。

<海への出口>

パラグアイの地政学的な特徴として、内陸国である、つまり海がないということがあります。これは地理的現実であって、戦争でもしない限り海への出口はできませんので(尤も、過去に一度海への出口を求めて開戦し、ひどい目に遭った経験はありますが)、いかにしたらこの弱点を補えるかがパラグアイの重要な外交政策の一つとなっていることは、パラグアイ外交の一つの大きな特徴でしょう。このため内陸開発途上国(LLDC:Landlocked Developing Countries)というグループを作って、国連の場で河川による航行の自由とか内陸国への特惠関税の付与など、様々な措置を執るよう国際社会に訴えかけています。ただし、パラグアイはこの地政学的な弱点を逆手にとって、

南米の真ん中にあることから、パラグアイを南米の物流のハブにしようとしており、投資誘致などにおいてもこの点を積極的に宣伝しているという、なかなかしたたかな面も見せています。

<全方位外交>

なお、パラグアイと付き合っていて感じることは、小国であるがため、全方位外交を展開しなければならないということです。したがって、特定の諸国が対立関係にある場合、そのどちらかに付いていると見られるようなことは、たとえ間接的なことであっても慎重に避けます。君子危うきに近寄らず。長年の経験から得た処世術とでも言えるかもしれません。

<二国間関係>

◎その1:隣国の2大国

二国間関係について考えた場合、最も重要な国は、明らかにブラジルとアルゼンチンでしょう。パラグアイにとって、この隣国である2大国とは歴史的にも緊密な関係にあり、現在もメルコスールを構成する仲間として、非常に緊密な関係を維持しています。ブラジルとアルゼンチンは、各々パラグアイの輸出の30%と10%、輸入の25%と15%を占めているだけでなく、イタイブ発電所及びヤシレタ発電所を共同経営している等、その緊密さを表す例は枚挙にいとまがありません。但し、隣国との関係は常に難しいもので、その隣国が大国である場合は、特に難しいのも国際関係の常です。ご多分に漏れず、この両国に対するパラグアイの感情も複雑なものがあり、この2国とは、様々な交渉において、常に苦汁をなめさせられてきたというトラウマのようなものがあることも事実です。

◎その2:日本

日本との二国間関係は非常に良好です。長年の日系社会の活躍と日本政府からの経済協力により、我が国はパラグアイ官民から非常に高く評価されています。昨年はカルテス大統領の訪日も実現し、約200億円に上る道路整備計画への円借款の供与や約20億円の上下水道整備計画への無償資金援助もまとまりました。日本からも松島みどり経産副大臣(当時)がシウダ・デル・エステ市を訪問し、二国間関係の観点からも実り多い一年となりました。好調な国内経済を背景に、最近では日本企業の進出も相次ぎ、今後益々関係が緊密化していくものと



カルテス大統領訪日

思われます。

◎その3:台湾

なお、非常に特徴的な二国間関係として、パラグアイが台湾との外交関係を有する南米唯一の国であるということがあげられます。実はラテンアメリカには台湾と国交を有する国は12カ国あるのですが、パラグアイを除くすべては中米とカリブ海にあります。ちなみに全世界では22カ国です。世界の大部分の国が中国と国交を持ち、南米でもパラグアイを除くすべての国が中国と国交を結んでいる中で、昔から一貫して台湾と国交を結んでいるのですから、ずいぶんと義理堅い国だと言えるでしょう。台湾もこの友好に応じて積極的に経済協力を実施しており、たとえば、国会議事堂は台湾が無償で建設してくれたものですし、最近では昨年、貧困者向け公営住宅の建設資金として約70億円を供与しました。昨年はカルテス大統領も台湾を訪問しており、緊密な関係が続いています。

<終わりに>

パラグアイに勤務していますというと、パラグアイってどこにあるの？とよく聞かれます。パラグアイはそれほど国際場裡では地味な存在でしたが、今後カルテス政権の積極的な外交政策により、その存在感を増していくものと思われます。

(木村元 大使館 2015年2月)